



# 門限破りの代償

Paraphilia -倒錯の樂園-

※体験版

# 目次

## 第一章：みゆの門限は 20 時

## 第一章: みゆの門限は 20 時

「まずいまずいまずいまずい！！！」

みゆは息を切らしながら、夕暮れの街路を全力で駆けていた。心臓が激しく鼓動し、足が重く感じるのに、止まるわけにはいかない。何しろ、門限の 20 時が刻一刻と迫っているのだ。

みゆの家では、お母さんが厳しく定めたルールが絶対である。門限を 1 分でも過ぎればお仕置きが待

っている。そのお仕置きは「お尻ぺんぺん」であるから、みゆはこうして焦っているのだ。もうそんな年頃じゃないのに、お母さんの手でお尻をぺんぺんされるなんて、想像しただけで頬が熱くなる。

今日は友達と少し長く遊んでしまったのが失敗だった。時計を見ながら、必死にペダルを漕ぐように足を動かす。頭の中では、遅刻したらどうなるかのイメージが渦巻く。お母さんの厳しい顔、お膝の上に乗せられる屈辱。お尻に感じる強い痛みと、頬をつたう涙の感触.....そんな考えが、ますますみゆを

焦らせる。

「あと少し、あと少しで家に着く……！！」

みゆは自分に言い聞かせ、角を曲がった。街灯が点き始め、影が長く伸びる中、彼女の影も慌ただしく揺れる。汗が額を伝い、服が体に張り付く不快感を無視して、ただ前へ前へと意識を向ける。家までの道はいつもより長く感じた。

心の中でカウントダウンを始める。19 時 55 分。

間に合うか、間に合わないか。ギリギリの綱渡りだ。

もし遅れたら、お母さんの怒りが爆発するだろう。

過去のお仕置きを思い出し、胸が締め付けられる。

あの痛み、あの恥ずかしさ、そして終わった後の解

放感。でも今は、あの不思議と心地よい解放感では

なく、お尻ぺんぺんの恐怖が先行する。

しかし、そんなみゆの焦る気持ちなど知る由もな

く、道端でおばあさんが声をかけてきた。

(中略)

「遅いわね、みゆ。」

その声は低く、怒りを抑えたものだ。みゆの心に  
罪悪感が刺さる。お母さんの期待を裏切った自分、  
ルールを守れなかった自分。慌てて事情を説明する。

「ごめんなさい、おばあさんに道を聞かれて、無  
視できなくて……本当に急いでたんだけど……。」

しかし、お母さんは一蹴した。



「そもそも、ギリギリまで遊んでるのが悪いんじゃないの？ ルールはルールよ。言い訳は聞かないわ。」

お母さんの言葉に容赦はない。みゆの腕を強く掴み、リビングへ連れていく。掴まれた腕の痛みより、心の痛みが大きい。お母さんを失望させた後悔が、涙を誘った。

リビングの中央には、すでにお母さんが座るための椅子が置かれていた。いつものお仕置き用の配置だ。みゆの心臓が早鐘のように鳴る。恐怖が体を硬

直させる。これから起こることを想像し、恐怖と恥ずかしさが込み上げ、みゆの顔が赤くなった。

「お膝に来なさい。」

お母さんは椅子に腰を下ろし、みゆを自分の膝の上に来るよう促す。抵抗しても無駄だと知っているみゆは、素直に従う。お膝に乗った瞬間、幼い頃の記憶が蘇る。守れなかった約束、繰り返す失敗。自分はいつまでこんな目に遭うんだろう。

お母さんの手がみゆの純白のワンピースをたくし  
上げ、下着を膝まで下ろす。冷たい空気がお尻に触  
れ、恥ずかしさが爆発する。お尻を丸出しにされる  
屈辱と、痛みが来る前の緊張感に、みゆは震えた。

「今日は厳しくお仕置きします。」

お母さんの宣言に、みゆは絶望した。心が沈む。  
許しを乞う言葉が喉に詰まる。次の瞬間、お母さん  
の平手が力強くみゆのお尻を叩いた。

ぱんっつ。

強烈な痛みが一瞬で広がる。みゆの体がびくんと  
跳ね、思わず声が漏れた。

「あっ……！」

衝撃が心まで響く。痛みとともに、後悔が湧き上  
がる。なぜもっと早く帰らなかったのか。お母さん  
の手が再び振り下ろされた。

ぱんっ。ぱんっ。

痛みが積み重なる。お尻が熱くなり始め、みゆの  
目に涙がにじんだ。

「お母さん、ごめんなさい……！」

小さな声で謝るが、お母さんの手は止まらない。  
心の中でお母さんの怒りを想像する。お母さんもき  
っと、みゆを心配して怒ってくれている。でも今は、  
そんな理屈より痛みが優先。恥ずかしさと罪悪感が

混じり、涙がぽろぽろと零れ落ちた。

ぱんっ。ぱんっ。ぱんっ。

むき出しになったみゆの小さなお尻をぺんぺんする音が部屋に響きわたる。痛い、熱い。涙がみゆの頬を伝い、鼻水が混じり始めた。

「お、お母さん、ごめんなさい……もう門限破り  
ません……。」

みゆの声は嗚咽に変わり、肩が上下に揺れる。お

母さんは無言でぺんぺんし続ける。リズムは崩さない。みゆの頭の中は痛みでいっぱいになった。思考が止まり、ただ謝罪の言葉が繰り返される。自分をお仕置きするお母さんの愛情を感じつつも、やはり恐怖が勝るのだった。

ぱんっ。ぱんっ。ぱんっ。ぱんっ。

お尻がじんじん疼き、淡いピンク色に染まり始めているのが想像できる。みゆは泣きじゃくり、息も絶え絶えに謝罪を繰り返した。

「ひっく……ごめんなさい……いたいよお……。」

涙がぽたぽたと床に落ち、みゆの視界がぼやける。

お母さんの手はまだまだ止まらない。心が折れそう

になる。いつ終わるのだろう。この痛みから逃れた

い一心で、ごめんなさいを繰り返す。みゆのお仕置

きはまだ始まったばかりだ。